様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３３９２２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３３７７

研究課題名（和文）イタリアオペラ作品における実践的な楽譜・台本解釈法と発語法の新しい体系化

研究課題名（英文）Introducing a new system of practical sheet music, script interpretation and speech in Italian opera

研究代表者
森　雅史（Mori, Masashi）

名古屋音楽大学・音楽学部・准教授（移行）

研究者番号：５０７６７６６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：【イタリアオペラ作品における歌唱のための実践的な楽譜・台本解釈法と発語法の新しい体系化】を掲げた本研究だが、バリトン歌手マッティーア・オリヴィエーリ史、コレペティトゥア岩渕慶子女史の協力を得て、2019年12月に名古屋と富山で実施したリサイタルを大きな成果として挙げたい。これは、両研究協力者と本研究内容について討論と修正を重ねながら実践的な演奏による実証を試みたものである。また、研究内容の実践的な指導の代表的な成果としては、愛知トリエンナーレ2019 舞台芸術公募プログラム 第32回オペラ公演「めいおんオペラティックコンサート．シェイクスピア変奏曲～劇情の魅力～」が挙げられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国で未だ認知度の低いイタリア語発音専門辞書「Il dipi.Dizionario di Pronuncia Italiana」やオペラ台本における韻律を解説した書籍「Metro e Canto nell’opera Italiana」などに基づき、舞台発語法や台本解釈法を日本人学習者向けに簡素ではあるが体系化することで、イタリアオペラ作品における歌唱、特にレチタティーヴォの指導・表現に大きな影響を与える事が実証できた。これは、これまで漠然としていた歌唱時の発語と音楽的・演劇的表現の結びつきを学習者に指導の裏付けとして活用が可能であり、今後の我が国の声楽指導のレベル向上に繋がる成果と考える。

研究成果の概要（英文）：As a representative achievement, in December 2019 I invited Italian baritone singer Mattia Olivieri and pianist Keiko Iwabuchi to Toyama and Nagoya Recitals can be mentioned. This Recitals were an attempt to demonstrate the contents of this research by practical performance with repeated discussions and corrections.
An opportunity for educational achievements in this research is the Aichi Triennale 2019 "Meion Operatic concert Shakespeare Variations".

研究分野：オペラ

キーワード：イタリアオペラ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景
本研究は、私が西欧でオペラ歌手として活動を経て帰国した 3 年後に申請したが、当時は特に日本におけるイタリアオペラ作品の発語法、歌唱旋律の解釈や指導法に疑問を抱いていた時期であった。私が日本人歌手として西欧の劇場でソリストとして経験を積むことが出来た大きな要因としては、所属していたボローニャ歌劇場オペラ研修所での指導と研究によるところが大きく、同研修所で用いられていた伝統的な技術や歴史的資料の学術的検証の上に成立している当時最新の研究成果の多くは日本に伝わっていなかった。
本研究は、こうしたイタリアオペラ作品における演奏解釈上の基本理念である重要なルールや情報を日本国内の演奏の現場や教育機関で取り入れ、将来的に体系化されることを目標に掲げた。具体的には、作品解釈時に必要不可欠な①「**歌唱時のイタリア語の発語法**」や、②「**オペラの台本（イタリア詩）の韻律解釈に基づく表現法**」、作曲家の特性を踏まえた③「**歌唱旋律における楽譜の解釈法**」これら 3 つの分野を研究の柱として、西欧各地の歌劇場の指導者、演奏者、音楽学者と改めて慎重に議論を重ねながら、日本人に理解しやすく具体的に演奏や指導に活用させることを目指すべくスタートさせた。

２．研究の目的
我が国では、オペラ作品の直筆譜から考察した楽譜解釈法や、イタリア語の舞台発語法、イタリア詩の韻律を踏まえたオペラ作品の台本読解といった歌唱時に軸となる分野の研究が西欧に比べ盛んではなく、この分野の研究の停滞と、日本人歌手が西欧で活躍出来ないことは決して無関係ではないのではないかと推察した。本研究は私がボローニャ歌劇場オペラ研修所で受けた指導内容を先述した 3 つの柱を軸にまとめ、音楽学者、歌劇場の指導者、指揮者、歌手陣と共に、考察・議論を踏まえて発展させ、日本人声楽学習者の為のオペラ作品の解釈法、演奏法として新しく体系化することを目的としている。

３．研究の方法
本研究は平成 29 年度から平成 31 年度の 3 年間で実施する予定だったが、延長を届け出て最終的には 4 年間を要した。大枠としては、2015 年までの在欧中に取集した研究資料と本研究の基盤となる研究期間中に収集するイタリア語による文献を日本語に翻訳・要約し研究の基礎をまとめ、並行して研究内容を様々なオペラ公演や演奏会で取り入れながらその有用性を実証する。更に毎年度海外研修として、イタリアの主要都市でオペラ解釈に関する資料や情報を収集しながら、作曲当時と現在の演奏形態・解釈法を比較し、研究の妥当性と問題点についてイタリア各地の歌劇場関係者、音楽院指導者、音楽学者、歌手、と議論・意見交換を重ね、出来る限り詳細に区分して整理をする。
　また本研究期間中、日本人声楽学習者へのイタリアオペラ作品に関する指導を通じて、歌唱時（特にレチタティーヴォ・セッコ）における幾つかの大まかなイタリア語の発音の癖や陥りやすい間違い統計とその改善法をまとめ、それらを実際にフィードバックしながら特に発語分野における理想的な指導法の体系化を図る。
　具体的に「**歌唱時のイタリア語の発語法**」に関しては、発音専門辞書「Il dipi.Dizionario di Pronuncia Italiana」や伊和中辞典（小学館）を用いて研究を進め、既存の発語情報と照らし合わせながら、本研究成果の実演や指導の際の有用性と活用法を模索する。「**オペラの台本（イタリア詩）の韻律解釈に基づく表現法**」に関しては、ボローニャ歌劇場オペラ研修所で配布された資料や「Paolo Fabbri 著:Metro e Canto nell’opera Italiana」といった資料を検証しながら実演や実際の指導を通じて研究を行い、「**歌唱旋律における楽譜の解釈法**」に関しては、ボローニャ国立音楽博物館やボローニャ・アッカデミアフィラルモニカで様々な資料や直筆譜ならびにそれらのファクシミリ版を参照したり、音楽学者でありアッカデミアフィラルモニカの理事でもある Piero Mioli 氏からも話を伺うなどして研究を進めた。しかしながら、こちらの分野に関しては、作曲家 Vincenzo Righini における記譜法と Rossini の記譜法の共通点を調べる段階で新型コロナウィルスの影響を受けて研究資料を獲得出来ないまま滞ってしまっている。その為、蓄音機ならびに SP レコードの専門家である梅田英喜氏に協力を仰ぎ、1800 年代後半から 1950 年代までの SP レコードによる声楽作品の録音資料から、歌唱スタイルや解釈法の歴史を紐解くことに研究方法を代替することとした。

４．研究成果
【イタリアオペラ作品における歌唱のための実践的な楽譜・台本解釈法と発語法の新しい体系化】を掲げた本研究だが、最も大きな成果として、研究 3 年目である 2019 年 12 月に名古屋と富山で実施したリサイタルを挙げたい。この演奏会は Vincenzo Righini、Gioachino Rossini、Vincenzo Bellini、Gaetano Donizetti、Giuseppe Verdi のオペラ作品からアリアや重唱を取り上げ、プログラムの楽曲解説までを自身で行った。本演奏会では、発音専門辞書「Il dipi.Dizionario di Pronuncia Italiana」やオペラ台本における韻律につい

て取り扱った書籍「Paolo Fabbri 著:Metro e Canto nell’opera Italiana」などに基づいた舞台発語法や台本解釈法を踏まえて準備を重ね、現在スカラ座を代表する西欧の歌劇場で主役を担うイタリア人歌手マッティア・オリヴィエーリ氏と、西欧の一流歌劇場でのコレペティトゥアとして活躍し、現在は新国立劇場オペラ研修所で歌手の指導を担当している岩渕慶子女史に本研究内容の有用性の判断を仰ぎながら、討論と修正を重ねて、両氏との共演を通じてその実証を試みたものである。

また、本研究内容を高等教育機関での活用の為に体系化を試みた発語法ならびに韻律解釈法は、イタリアオペラ作品における歌唱時、特にレチタティーヴォの指導・表現に大きな成果を挙げられることは、私が指導者として携わった名古屋音楽大学カレッジオペラ『Così fan tutte 2017』、『Le nozze di Figaro 2018』、『Così fan tutte 2019』、『La selva padrona 2020』の他、愛知トリエンナーレ 2019 舞台芸術公募プログラム 第 32 回オペラ公演「めいおんオペラティックコンサート．シェイクスピア変奏曲～劇情の魅力～」といった公演を通じて実証している。

また、その他の学術的な成果としては、「**歌唱旋律における楽譜の解釈法**」を研究する過程で、Bologna 出身の歌手であり、後に作曲家としてモーツァルトと同時期にウィーンの王宮で活躍した Vincenzo Righini の直筆譜を研究していた際に、その記譜法が Gioachino Rossini のそれと類似点が多数見つかったことが挙げられる。Rossini 自身も歌手として素晴らしい力量を持ち、また同じ Bologna で作曲法を学んだことからその記譜法に共通点が見いだされる事は想像に難くないが、Righini 研究は、ボローニャ派ならびにロッシーニ作品の演奏法ならびに記譜法の特徴を記した名著 Alberto Zedda 氏著『DIVAGAZIONI ROSSINIANE』の内容の裏付けや、新たな観点からの演奏解釈ならびに逆説的な発見が期待出来る。残念ながら、新型コロナウィルスの影響により渡欧が叶わないことからこの研究は凍結してしまっているが、コロナ収束後に独立した研究として取り組む予定でいる。

研究を延長した 4 年目の成果としては、本研究から派生した新たな研究が挙げられる。本研究における歌唱旋律における楽譜の解釈の歴史を 1800 年代後半～1950 年代までの SP レコードによる歌唱録音から紐解く研究方法に移したことで、同時に近代的な歌唱技術や歌声の変遷を辿る事となり、同時に新型コロナウィルス流行に起因したリモートレッスンによる歌唱指導を実施する過程で生じる偏りや不合理を解消する目的で着想した『**可視化した音声データを活用した、イタリア・ベルカント唱法に基づく歌唱指導の有用性の検証、ならびに同データを用いた実践的な声楽指導法と指導環境の体系化**』が新たに基盤 C の研究として採択されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	岩渕　慶子 (Keiko Iwabuchi)		
研究協力者	オリヴィエーリ　マッティア (Olivieri Mattia)		
研究協力者	梅田　英喜 (Umeda Hideki)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関